

思いをこめたおにぎり

塩竈市立第三小学校 6年 藤 佐 夏 帆

私のお母さんは、よくおにぎりをつくってくれる、私はそのおにぎりを食べて「私もこんなおにぎりをつくってみたい。」とよく思う。でも私は、料理は得意だけど、おにぎりをつくるのは苦手だ。

でもそんなある日、私のお母さんは救急車で運ばれてしまった。私は涙が止まらなかった。夜中までずっとずっと泣き続けた。自分を責めた。「私がもっとちゃんとしてたら。」「お母さんのことを助けてあげたらこんなことにならなかったのに。」心が苦しい、痛い自分の生きてる意味が分からなくなって死にたい気分だった。でも、お母さんはそんな私にメールをくれた。「ママは大丈夫だから、心配しないで。」私はそのメールを見てもっと涙がでてきた。本当はママもつらいはずなのに私のためにこんなメール…。私は、その時思った。ママになんかしてあげたい、小さなことでいいからやってあげたい。

次の日、ママからメールがきた。「ママ、なっちゃんのおにぎりが食べたいな。」私はその時なにかを感じた。私がママに美味しいおにぎりをつくってあげるそう思った。私は、エプロンを着ておにぎりをつくる準備をした。ママが早く退院できるようにママの好きな具材のさけを焼いて中に入れてあげたにぎってる時もくずれないように変な形にならないようにがんばった。私が一番きれいなのりをつけるのもいつもはぐちゃぐちゃになるのになぜかうまくつけた。なんだか魔法がかかったかのような。私はそのおにぎりを持って一人でママの病院に行った私は、ママに涙を見せないように病室に入る前に深呼吸をして病室に入った私は、ママの注射がうたれていた手を見て自然と涙がでてきた。でも、がんばってママにおにぎりを渡した。ママはそのおにぎりを食べて「ママこんなおにぎり食べたことない絶対元気になる。」といて私に笑ってみせた。

その1週間後ママは退院した。私が学校から帰ってくるとママは、「おかえり、なっちゃんのおにぎり食べて元気になったよ。」と言ってくれた。そして、「一緒におにぎりつくろっか。」といて私と一緒ににおにぎりをつくってくれた。

その後私は、苦手だったおにぎりも得意になりました。